

2021年5月9日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「主は、この時代に一つのことをする」

聖書：使徒言行録13:1～3, 41～52

初期教会はどのような教会だったか。「この教会に……、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン……がいた」とある。「ニゲル」とはアフリカなどから来た肌の黒い人を現す。また、「キレネ人」もアフリカの地域で、よそから来た貧しい人を指している。その対照的に「マナエン」は、裕福で地位も高く偉い人であった。「領主ヘロデ」とは、ローマ帝国領土の領主ヘロデのことで、そのヘロデと一緒に育ったということであるから裕福な人物であろう。アンティオキア教会は、ユダヤ人、異邦人、貧しい者、裕福な者も、一緒に礼拝に与かっていたことが分かる。そこには、国、地域の違いを越え、肌の色、文化や言語の違いを越えて、礼拝が成されていた。教会は、教会の働きを担う一人一人であった。

パウロは、会堂で語る機会が与えられた。そこで丁寧にイエスと言うお方がキリストであるということ、あの木に掛けられ、殺されたイエスこそが救い主、キリストであることを語るのだが……。このパウロの話は、人々に非常に喜ばれて、次の安息日にも同じ話をしてくれと頼まれた。しかし、次の安息日に会堂に入ろうとすると、力のあるユダヤ人らが、パウロたちを妬(ねた)み、口汚くののしって、話すことに反対した。ユダヤ人にとって、「イエス」がキリストとはどうしても信じる事が出来ない。ましてや、キリストが十字架に磔(はりつけ)にされ、死んでしまうということが、どうしても理解できないのである。《『見よ、侮(あなど)る者よ、驚け。滅び去れ。わたしは、お前たちの時代に一つの事を行う。人が詳しく説明しても、／お前たちにはとうてい信じられない事を。』》(ハバクク 1:5)、これは旧約の言葉で、ユダヤ人のキリストに対する姿勢が問われ、預言されているということになる。

ただもちろん、この言葉は、ユダヤ人のみに語られたのではなく、主は今のこの時代にも、語ってくださっていると受け取るべきであろう。「主は、この時代にも一つのことをする」と。「一つのこと」とは何か？「主は、この時代に一つのことをする」それは、この時代にも「地の塩、世の光」となる主の教会を建てるということ。その教会とは、「侮る者」には、とうてい信じられない、教会を主は建てるということ。人を見下す者、侮る者は、驚き、滅び去るほどに、教会を仰ぎ見る。何故ならば、教会はまさに、キリストの体に属するものでなければならぬからである。時に教会は、侮る者の側に立ってしまっていないか。

神学生時代に説教でお世話になった関田寛雄先生が、私たちにこんな言葉を残している。「神学と教会の歩む道は……権力におもねることなく民衆と共に歩む事の中のみ、神学と教会の活路がある」と。この時代に、語るべきことを語れる教会として、歩ませて頂きたい。(神谷)